

Title	南蠻屏風の異國的内容
Sub Title	
Author	岡本, 良知(Okamoto, Yoshitomo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.3 (1940. 12) ,p.83(463)- 109(489)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19401200-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

南蠻屏風の異國的内容

岡 本 良 知

- | | |
|---------|---|
| 一、序 | 說 |
| 二、南 蠻 人 | |
| 三、天 主 堂 | |
| 四、南 蠻 船 | |
| 五、港 市 | |

一、序 說

茲に私が論じやうとするところは所謂「南蠻屏風」の内容である。美術史的見地を離れて、歴史的検討をなすのであるが、而かも夫れは全面的ではなく個別的であり、且つ異國的要素のみに限るのである。従つて既に世に出てゐる先輩學者の研究の如く廣い範圍に亙らない。されば此の文に於ては特に繪畫の製作時代を論せず、作者の如何とか畫風とかには全く觸れない。何故なら先輩學者の考究によつて、其

の方面では今や行き着くところまで行き着いてゐるやうであるに反し、寧ろ今私の論じやうとする方面には猶幾つかの疑問が残され、未解決の點が寡くはないからである。

思ふに、過去に於て「南蠻屏風」を論じた幾人もの學者は、常に資料たる僅少の屏風を對照として來たから、論題は狭くして略々一定し、見解は僅かの相違を示すことが多かつた。今日では屏風の存在の知られた數も昔日に數倍してゐるけれども、其の種類、畫面に於て特に異風なるものがなく、大多數は一樣であるから、やはり私の説くところが、先輩諸學者と論題をも範圍をも目標をも同じくするところが多いであらう。

二、南 蠻 人

所謂南蠻屏風畫面の中心をなすものは南蠻人である。日本人は添景的に描かれてゐるのが多い。南蠻人といつて其處では凡そ在俗人即ち船員等の一群と宣教師の一群とに識別せられる。私の見るところでは第一群に屬するものは皆袴様のズボン即ち當時ポルトガルの植民地特有の服裝の一たるボンバシャを着けてゐるが、其のうちには縁狭き帽子を冠り、帶劍し、概ね蓄鬚する者と、無帽無劍無鬚にして粗い縞柄の衣服を着けて、前者に扈從し、又は荷揚げや船内の操作に従ふ者との二種類がある。前者がポルトガル人であり、後者が奴隸なることは容易に領かれる。

現在知られてゐる屏風中には南蠻人の商取引の場面を描いたものは極めて寡ない。恐らく商業關係のことは畫家に興味を起させなかつたからであらう。兎に角、夫れ等の少數の貿易現場の畫面に於ては明らかに彼我兩國の商人も夫れらしいと見分けられるけれども、夫れ以外の多くの屏風では、ポルトガル人の大部分は船員であると見倣す方が妥當であらう。然し當時の印度日本間の航海船の組織は、私が他の書に於て詳述した如く、⁽¹⁾強大なる實權を與へられてゐた船のカピタン・モールに屢々在印度の上級商人を以て任せられたこともあつた程であるから、便乗の商人が商取引に従つたのは勿論、船員等も公私兩様又直接間接兩様の意味で彼我的貿易に關與したであらう。又ポルトガルの政府直屬の定航船^{ナウ}の外に、富商の私船（但し其の場合には多くジャンク船であつた）も渡來したのである。其の上當時のポルトガル船員と商人との間に服裝に於て如何程の區別があつたかといふことも確かめることが出来ないから、南蠻船より上陸する一群中には勿論商人をも交へてゐたと見倣すべきである。

南蠻人上陸の行列の描かれる或る屏風畫面に於て、其の中心をなしてきらびやかな服裝を着け多數の從者を隨へ又は從者の開いてゐる日傘の下を威容を以て進む人物がある。夫れは船のカピタン・モールに外ならない。カピタン・モール以外にも之に類似の様子を示して歩む人物が二、三人見える畫もある。高級船員若しくは富裕なる商人と認めねばなるまい。船員、商人を通じて、當時アジャ植民地にゐたポルトガル人の服裝に就では今日他の資料によつて充分明かにするのは不可能であり、リンスホーテンの

著書所載の圖のゴアの風俗等に比較して大略を知られるに過ぎないことは嘗てカルネイロ氏の説いたところであるが、夫れによつて屏風畫面のポルトガル人の服裝がかなり寫實的であるといふことだけは首肯されるやうである。其の點に於てはポルトガル人の顔容なり動作なりが特に人目を惹いたと考へられやうに、服裝は夫れにも増して時代人の間に模倣さへ生じた程注目された筈であるから、好奇心に富む屏風畫家の綿密なる觀察の對象となり、其の特徴を明かにせねばならなかつたことも自らに理解されるわけであらう。

南蠻人の顔容や動作に就て見るに、ポルトガル人はヨーロッパ人のうちではどちらかといへば東洋人に比較的近似した容貌を有つてゐるから、現代人の考へからすれば、日本人好みに描いても甚だしく失當ではないのであるが、他のヨーロッパ人を殆んど見知らない當時の日本人にとつては、朝鮮人よりも支那人よりも更に南洋の馬來人よりも際立つて差別すべき顔容と動作とを彼等ポルトガル人に認めたに違ひない。夫れ故に彼我兩國人は勿論他の諸國人とも差別して描いたと考へねばならない。事實に於て屏風畫面の南蠻人の顔容に於ても動作に於ても、日本人と隔然と異なるところがあり、又彼等の従者たり下級船員等とも差別されてゐる。而して、概ね之を高級なる人物として描かれたことは容易に觀取し得る。

従者たり下級船員たる人物を觀るに、顔容ではポルトガル人とは蓄鬚の有無によつて區別されるのみ

ならず、顔色に於てもポルトガル人よりも黒色乃至褐色の程度が濃くなつてゐるやうに見える。之を畫中の日本人の顔色に對照しても遙かに濃色である。更に奴隸中には下半身の裸體に描かれてゐるものさへあるから、畫家の心中に日本人を彼等に對比すべからぬものといふ觀念が抱かれてゐたことを證するのであらう。

服裝の上よりいへば彼等も亦南蠻風である。即ちポルトガル人風であるといふことが出来る。實際ポルトガル人に使用せられてゐた奴隸は其の何れの國人たるを問はず、ポルトガル人の風俗に化したのであらう。然し彼等の衣服はポルトガル人の夫れと生地なり模様なりが異なつてゐる。畫面に見える限りでは、生地が濃色よりも白色に近く其の衣服の縞柄が頗る粗大である。思ふに、是はポルトガル人が一般に毛織物又は絹織物の美麗なる裝飾あるものを身に着けてゐるに對し、奴隸が當時印度に産した粗製なる綿布を纏ふてゐたことを示すのであらう。

是等のポルトガル人の從者たり下級船員たる奴隸が如何なる人種に屬してゐたか。印度人、馬來人、支那人もゐたであらう。又アフリカの黒人もゐたであらう。然し、屏風畫面では夫れは充分識別されてゐない。當時の日本人にはポルトガル人と彼等奴隸とを明瞭に識別しても、彼等奴隸の各人に就ては其の何國人であるかを差別して見る必要がなかつたのであらう。畫家は恐らく夫れに關する一般的なる知識をさへ具へてゐなかつたのであらう。

然し當時の記録を見ると日本人はアフリカ黑人に關する限り頗る強い好奇心を以て之を眺めたことは次の消息を以てしても推察されるであらう。其の一は天正九年二月二十三日（一五八一年三月二十六日）京都に於けるパードレ・ワリニヤニの織田信長謁見記である。

「信長は此のパードレに格外の厚遇をした。其のとき、嘗て日本人の其の國（此處では近畿地方を意味する）で見たことのない次の三事實に頗る驚嘆した。其の一はパードレ・ヴィジタドールの身長である。ヨーロッパ人の間ですら注目されるものであつた。其の二はパードレの連れて行つた一蠻人である。日本人はもとより此の蠻人を知らなかつたから、數多の人々がひしめき合ふて觀やうとしたことは、パードレのために好い宣傳になつた。日本人のうちには、其の捲き縮んだ頭髮、或ひは其の鼻の形、或ひは其の冗辯に驚き入つた者がある。信長は其の體色の生來のものなることを納得出來ずして、深い好奇心を抱いて上半身を脱がしめて之を洗はせた。然るに洗へば洗ふ程いよ／＼黒さを増して行つた。其の三はオルガンである。⁽³⁾」

信長の死後間もなく著された太田牛一の「信長公記」（卷一四）にも、此の時の有様が少し誤り傳へられて次の如く見える。「天正九年二月二十三日きりしたん國より黒坊主參り候事之齡廿六七と見えたり惣之身の黒き事牛の如彼男健やかに器量也爾も強力十之人に勝たり伴天連召列參御禮申上誠以御威光古今不及三國名物か様に希有之物共細々拜見難有御事也」

其の二は、豊臣秀吉が朝鮮征伐の壯舉をなし、本營を肥前名護屋に置いて自ら其處に滞在したとき、一五九三年（文祿三年）晩夏に、長崎からポルトガル船のカピタン・ガスパール・ピント・ダ・ローシャが秀吉の許へ伺候した。カピタンは槍持ちの黒人、太鼓、笛を携へた黒人等數人を護衛として従へて行つたが、秀吉への謁見の後、黒人が秀吉の坐前で奇妙な舞踏をして列席の人々を失笑させたことがルイス・フロイスの報告に載つてゐる。

「黒人は元來舞踏を好むため一座にあつた人々に大いに笑ひを爆發させるやうなことが生じた。其の踊りは順序もなく調和もなく此方より彼方へ跳ね飛ぶといふものであつた。而かも一度踊り始めると、際限なく續けて最早充分だと繰り返してやうやう止めた程である。太閤様は黒人の一人一人に其の褒美として自らカタビラを一枚づつ與へ、謝意を表するため夫れを即座で身に着けよと命じたので、彼等は印度のマドロスのやうに頭に捲きつけた。夫れは太閤様を初めとして、其處に居流れた群卿の慰みとなつた一の奇觀である」⁽³⁾

黒人はポルトガル船やポルトガル人のみが之を使役してゐたのではないから、慶長以後のエスパニヤ船やオランダ船やイギリス船の記録にも見えるが、其のうちで慶長元年（一五九六年）土佐の浦戸へ漂着したエスパニヤのサン・フェリッペに就て、豊臣秀吉が同船の積荷全部を沒收し、併せて船内の黒人をも京都へ呼び寄せ手許に留めて愛翫したことが、アゴスチーニユ・デ・サンタ・マリヤの記録に見え、慶

長十六年（一六一一年）メキシコから徳川幕府へ使命を帯びて來たセバスチャン・ビスカイノが仙臺に滞在したとき、隨從の鼓手であつた二黒人を見やうとて集まつた民衆が頗る多く、其のうちには、黒人の黒色を消さうと試みた人數も決して少くなかつたといふやうな、天正の信長のなしたと同様のことが記録されてゐる。是等の消息を以てしても慶長年間に至つて猶黒人が珍らしかつたことは想像に餘りあらう。

此處に指摘したものは天正、慶長の間の特に興味ある事實のみであり、且つ中央爲政者に關するものであるが、ポルトガル人通航百年間に於ける九州諸港の黒人に就ては簡略乍ら他にも數多く見られる。屏風の畫家は多く近畿地方の人であつたと推定されてゐるから、假に信長や秀吉程ではなかつたとしても、黒人を珍稀なる人種として之に長崎居住者よりも深い好奇心を向けなければならなかつた筈である。

アフリカ黒人の容貌は現今の日本人が見ても特に目をみはらねばならぬ程怪異である。其の濃黒色なる體軀、極端なる縮毛、濃赤色の唇、愚鈍さうなる印象は、平素殆んど眼に觸れない日本では夫れを特別の人種として注目するのは當然であり、三百年前の日本では更に其の印象が深刻であつたのは當然である。而かも當時のポルトガル人の奴隸のうちではアフリカ黒人が最も數多かつた筈であるから、毎年日本へ來たポルトガル船にも多數從業してゐたことであらう。然るに南蠻屏風のうちに彼等の特徴が必

ずしも現れてゐないわけではないが、ポルトガル船員や宣教師等の顔容に比較して稍々鮮明を缺くといはねばならない。其の何故なるかを知り難いが、恐らく作品の目的とするところが、南蠻人及び其の船と物品とにあつて他になかつたこと即ち描畫對照物の輕重に因るのであらう。

次に宣教師の一群を見るに、屏風によつて黒き長衣を着けた耶蘇會神父のみの現れるもあり、鼠色跣足のフランシスコ會修道士の之に混ずるもあり、稀には他のドミニコ會、アウグスチン會の修道士の添加されるものもある。然し、黒衣の耶蘇會神父のみの畫は最も多く、他の諸會派修道士の混ずるものでも、常に耶蘇會神父は其の數に於て他に勝つてゐる。其の理由はポルトガル船と耶蘇會との關係を聯想すれば當然首肯し得られることである。而して天主堂のことを別にして、神父の人數のみより考へても概ね屏風畫面の構成さるべき時代が推察され、耶蘇會以外の修道士が添加されてゐるものは更に夫れを限定せらるべきことは既に他の學者の説いた如くである。且つ長崎以外の他の港ではないことも夫れによつて傍證し得るわけである。

宣教師の顔容に就て特に注意を惹くのはポルトガル人の夫れと稍々異なる様に描かれてゐることである。勿論彼等が同國人又は隣國人であつて其の間に差別のあるべき筈がないのであるが、一般日本人殊に屏風畫家が在俗者と聖職者と兩者の職業、環境、風俗、特に生活狀態より受けた觀念を異にしたのであらうと思ふ。

猶他の留意すべき事實は日本の港等を描いた屏風畫面中に絶えて西洋婦人の現れないことである。ポルトガル人の東洋進出は全く婦人を伴はなかつたのであるから、日本へも婦人の渡來があつたといふ記録もなく、又あるべき筈もないから、畫中に出現しないのは當然である。然し日本以外の異國の狀景の描かれた畫面には屢々婦人の姿が見られる。夫れ等の異國の畫面がゴアや媽港等が描かれたのであらうともいはれてゐるが、兎に角畫家の實見したところに依るのでないことは疑ひないから、夫れと關聯して其處に現れる婦人に就ても私は果して西洋婦人か若しくは支那や印度の婦人か、夫れとも畫家の架空なる構案によるものかとの疑惑を以て觀てゐる者である。

屏風畫中の日本人の風俗中に屢々ポルトガル人に模倣した物が添加されてゐるが、夫れに就ては多くの學者が留意し、研究もされてゐることであるから特に語を加へるまでもあるまい。

註(1) 拙著「十六世紀日歐交通史の研究」、第二編、第二章

(2) 日葡交通第一輯所載、南蠻美術考

(3) Frois, Apparatos. II, fl. 462.

三、天主堂

屏風畫面に見える天主堂又は宣教師館に就て之を概觀するに、聖堂の屋根、棟は大略執れの屏風も一

様の形をとり、大きな圓塔や尖塔の現れてゐるものもある。棟又は門等の上に十字架を載せてゐるのは共通である。其の外観は和洋混交の風であり、支那式の屋根飾り等も識別出来る。而して天主堂なり宣教師館なりは、畫面に見える限りは木造建築であると認めて失當でなからう。

さて天主堂の建築様式は當時の宣教師の記錄に徴しても、之を簡單に如何なる風であつたかを説明することが出来ない。夫れに就て私は無數の聖堂新建築に關する消息に接することが出来たが、夫れを一々此處に列舉しやうとは思はない。何故なら後に論ずる如く、屏風の製作された年代が文祿慶長頃より多くは遡らず、港津も長崎以外ではないから、其の時代及び以後の長崎に在つた教會堂に關する記錄に徴すれば足りるからである。長崎の天主堂に關する消息も數寡くはないが、最も留意に價すべき極めて特色あるものは次の一五八五年（天正十三年）のルイス・フロイスの報告であらう。

「長崎の天主堂は參堂の人の次第に増加したため數年前既に二度三度に亘り増築された。（中略）夫れ故に今日までに日本に造られたうちでは最も大きな且つ豪華なる天主堂の一を此の地に建造するに定つた。其のために約二千クルザードの喜捨が集められた。然し、材木は諸地方より海路陸路により當地に齎され、勞力は基督教徒等が或ひは自ら、或ひは子息や家僕等を以て提供し又金錢を代りに出したのである。誰も皆之を代價に見積れば五千クルザードでも及ばないと認めてゐる」¹⁾

又一六〇一年の年報にも次の如き重要なる報告が見える。

「パードレ等も當地の住民も皆豫てより能ふる限り大なる一天主堂を造らうと希望してゐた。主は本年夫れに着工するやうに御恩寵があつた。其のために二千クルザードの喜捨が集められた。其のうち千クルザードは大工を援助する勞働者を添えて住民中の日本人の有力者が提供したものであり、八百クルザードは前に種々の喜捨として集めてあつたのをパードレ等が之に充てたのである。大部分の木材が集められたので、今日まで日本に我等の有する最も見事なる天主堂の工事に着手した」

以上引用の唯二つの報告によつて、先づ天正慶長の間に建造された天主堂の規模の大きさが想像されやうし、悉く木造建築であつたことも確かめられる。而して建築に従つたのは殆んど日本の大工、左官等の工人であつたことも推察に難くない。天正八年（一五八〇年）に大友義鎮が豊後臼杵に壯麗なる天主堂を建築するために京都から特に大工を喚んだといふことが報せられてゐるが、長崎では天正以後には恐らく住民中に秀れた工人がゐただらうと思はれるから、豊後に於ける如く特に京都より工人を招く必要がなかつたかも知れない。長崎では毎年來往して數箇月間停泊するポルトガル船員若しくは乗客中に建築の技能を有して天主堂の建築に幾分でも關與した者もなかつたとはいへないが、夫れは極めて稀なる例と見做す方が妥當である。

かくして日本人の建造にかかる木造の建築物であつたことが明かになつた。されば果して洋風建物であつたか和風建物であつたかといふことが次の問題である。嘗て濱田耕作博士は、諸屏風に純粹なる洋

風の天主堂の描かれなかつた理由を以て「當時切支丹の會堂の建築は日本座敷の二階家のお寺の本堂みたやうなものでありまして、内部は桃山時代、足利の末から徳川初期であるから、當時の立派な寺院宮殿と同じやうな金碧燦爛たる襖、欄間などの裝飾が幾分用ひられてあつたかも知れない」と考へられた。此の説には私も大略讚意を表するものである。耶蘇會の日本宣敎の當初十年間豊後に於ては凡そ佛寺等をそのまま天主堂に襲用したことは推測に餘りある。永祿の頃に及び平戸、横瀬浦、島原、福田等に新天主堂が建設されたことは一五六二年のアルメイダの書翰、同年及び六五年のフェルナンデスの書翰、六四年及び六六年のコスメ・デ・トールレスの書翰等に報せられ、建築材料のことさへ傳へられてゐるから、夫れらの天主堂が全く日本の寺院其の儘であつたといふことは到底信ぜられない。天正年間に入ると肥前、豊後は勿論、近畿地方の諸國にも立派なとか廣大なとか形容される天主堂が建つたといふ消息は頗る多い。宣教師のいふ立派なとか廣大なとかいふ語は天主堂としてといふ意味であるから、夫れに洋風聖堂らしい點がかなり加へられたと解することが出来る。かくして慶長前後に於ける長崎に出来た諸天主堂が、夫れ以前の孰れのものよりも大きく見事であつたと報せられるのは、より廣大であり又より多く天主堂らしくなつたといふやうに理解すべきである。屏風の畫家が南蠻船や其の船員、商人や宣教師をかなり事實に近く描いたに拘らず、天主堂や宣教師館のみを非寫實的に表現したといふことは、此の種の畫の特色から見ても考へられぬといふ濱田博士とは私は意見を同じくするものであるから、當時

の和洋折衷の聖堂建築は諸屏風に見えるものに近かつたのであらうと思ふ。而して同時に當時として最も多く洋風を取り入れた建物であつたといふことは當然である。夫れに就て有馬、府内、安土、臼杵のコレジオ、セミナリオ等のボン・カムパニー・ルドヴィジの書に載せられる純洋式三階の建築の畫が、架空的のものであると濱田博士の斷定されたことに對しても（夫れ等の建物が天正中頃に出來たものであるから）、私も殆んど同意見を有することを明かにしてをかう。

然し、天主堂の内部に就ては、稍々意見を異にし、かなりヨーロッパの天主堂の夫れに近いものであつただらうと思ふ。前引した一六〇一年長崎新築の大天主堂にも「三つの身廊ナイズエがあり、周圍に廊下が廻らされてゐるので、日本人（信者）は頗る心地よさうに用ゐた」といひ、又長崎のコレジオの學生のうちには繪畫を頗る能くする者がゐて（其の一人は數年前ローマへ來たことがある）「眞實ヨーロッパ（諸天主堂）のものと比較し得る程の頗る立派な飾壁レタブロスを以て日本の諸天主堂を飾つた」といふこと、又主要なる諸天主堂のために「種々のオルガンや樂器類や時計が作られタたといふことも見え、又一六〇三年の年報には、同年丹波に造られた立派なる新天主堂の小禮拜堂カペラの拱アルコの上に天通寺と書かれたといふやうな僅かに二・三の記録を拾ふても、天主堂の内部が三つ乃至以上のナーヴェに分れ、祭壇の背後に飾壁レタブロスが上げられ、拱を以て正面が劃され、オルガンや時計等が備具されてゐたことが分る。夫れを以て内部の全般を推測すれば、殆んどヨーロッパの天主堂其の物に類したであらうと思ふて差し支へない。但し現

今でも地方の小都會には木造の天主堂があり、其の内部の信者の席が悉く疊を敷きつめられてある如く、當時も疊敷きであつたことは想像に難くない。^{*}天主堂内部は屏風畫面に現れないのであるが次手乍ら論及したわけである。

註(1) Frois, Apparatos, I fl. 295v.

(2) Guerreiro, Relação Anual. I, p. 82.

(3) Frois, Segunda Parte da Historia. p. 152.

(4) 朝日新聞社編、開國文化、一八一頁

(5) Guerreiro, op. cit. p. 119.

(6) Guerreiro, op. cit., II, p. 84.

四、南 蠻 船

南蠻船は悉くの屏風に描かれてゐるわけではない。又屏風畫の主役は南蠻人であつて船は夫れに比べれば其の位置より見ても第二の役を勤めてゐるやうである。然し、多くの屏風では船は寧ろ最も大きな特徴として認められやう。

南蠻屏風の船が何國の船であるかといふことが先づ第一の問題であらう。今日ではポルトガル船であることを疑ふ人も少なからうと思ふが、蛇足ながら夫れを確定するために當時の外國船渡來の經過を簡

略に指摘しやう。

天文以來寛永の鎖國までの百年間に我が國の港津へ往復したヨーロッパの船はポルトガル、エスパニヤ、オランダ、イギリスの四箇國のものであつた。其のうちイギリス船、オランダ船の渡來通商は一六〇八年即ち慶長八年以後にして、其の船員や商人の風俗が全く屏風畫に見える南蠻人の夫れとは異なるから、考慮の外に置いて差し支へがない。ポルトガル船は其の百年間終始殆んど毎年渡來した。エスパニヤ船は天正末に即ち一五八七年と八九年との二度フィリッピン群島より天草と薩摩へ漂來し、文祿、慶長年間にはときどき九州の諸港へ通商に來た。然し、夫れは毎年といふ程ではなかつたから其の度数に於ても隻數に於てもポルトガル船とは比較にならない。

而して畫面の南蠻船がエスパニヤ船ではないといふ最大の證據は常に耶蘇會の神父が之に點綴されてゐることである。耶蘇會の宣教師はポルトガルの勢力範圍でもエスパニヤの勢力範圍でも布教に従事し、兩國の夫れ夫れの官民と深い關係を有してゐた。然し、エスパニヤ人の領土へ赴くにはエスパニヤより渡り、ポルトガル人の勢力範圍や通商を行ふ國で布教するにはポルトガル船によつて往復したことは例外のない事實である。従つてフィリッピン群島へはメキシコを経て、日本へは印度、媽港を経て來り、且つ管轄も前者はメキシコ、後者は印度に屬してゐて、互に相犯することがなかつた。さればフィリッピン群島より日本布教のために渡つた耶蘇會教師は全く記録されなかつたのである。而して文祿慶長

以後の群島より頻りに布教に渡來したのは耶蘇會以外のフランシスコ、ドミニコ、アウグスチンの三會派であつた。而して日本に滞在した耶蘇會宣教師とポルトガル人との間に密接なる關係があり、相互に援助したことは明かに知られるが、フィリッピンより來るエスパニヤ人に對しては其の關係が極めて稀薄であつた。之に反し耶蘇會以外の三會派の修道士はエスパニヤ人と結托深くして、ポルトガル人と淺かつたのである。されば屏風畫面の南蠻船の入港を出迎へる聖職者として耶蘇會宣教師だけか又は耶蘇會宣教師を主として僅少の他會派の修道士が添えて描かれてゐるのは其の間の事情によつて理され、畫面の船がポルトガル船に外ならぬことが斷定されるに違ひない。

さて、ポルトガル船と決定すれば、次に畫面の船は如何なる船であつたか。畫面では船は人物や建築物に比して小さ過ぎるが、重心的位置を占めてゐないのであるから、實體其の儘に描く必要がなかつたのであらう。一般に畫面の南蠻船は二檣或ひは三檣、二重乃至三重の甲板、片舷十七門乃至十五門の砲を具へてゐる。各屏風の船型が大體に於て類似するに拘らず、其の微細な點に於ては全く同一ではないことに留意される。船體の大きさと主檣の高さと比較に於て、舷と甲板との線の曲直の程度に於て殊に相違が多い。これには事實に基づく點もあり、畫家の觀察の相違に歸すべき點もあらうと思ふ。之を當時日本へ渡來した實際の船に對照して見やう。

天文、永祿以後慶長末年までに渡來したポルトガル船には三種類があつた。即ちナウと稱し英語でキャ

ラックといふ種類とガレオンと稱する種類と支那風のジャンクとである。而して毎年のポルトガル政府の命を承けて來た官許の定期航海には殆んどナウを以て充てられ、ガレオンの渡來はこの久しい半世紀間に多くも五艘を出でなかつた。ジャンク船に至つては私商の船としてかなり頻繁に航來したけれど



ポルトガルのナウ「聖マルティニョ」

も、屏風に現れる船型がジャンク船ではないから、ここにはそれを考慮に置かない。かうして畫面の南蠻船が毎年の定航船たるナウに違ひないとするならば、ナウとは果して如何なる船種であるかを檢しやう。

我等は既に十六世紀及び十七世紀初めに亙るポルトガルのナウの發達變遷を説いたから、委細の點に就ては夫れに參照を請ふとして、十六世紀末十七世紀初頭のナウの船型を端的に示すために當代出來の模型の寫眞を示さう。夫れを諸屏風畫面中の南蠻船の多くの船體に對照して見るならば、兩者が殆んど相一致することは容易に知られる。船の大小や裝備に於ては、勿論船毎に異なるのであるから、孰れの畫面の船に於ても悉く一致する筈がない。

以上に述べたのは屏風中に最も多く見受ける大形船に就てであるが、其の外に船の首尾の稍々圓みを

帯びたもの、極端に丸められたもの等も描かれてゐる。殊に後者の場合に船形もかなり小さいと認められる。私は當時のポルトガルの航洋船に首尾に幾分の圓みのあるもののあつたことを知つてゐるが、夫れは構造上の僅少なる相異に過ぎないのであつて、或る屏風畫面に見える如き極端なる曲線的外觀を有してゐたのではない。屏風の畫家が夫れを實見したのかどうか、又架空の裝飾的要素の多分に加へられたものかどうかは私の判別に苦しむところである。夫れに就て想起するのは、天正末年に長崎港に常備されて防備用にも耶蘇會神父の乗用にも供された小形の洋船があつて住民よりフスタ船と稱せられてゐたのは、其の船名でなく船種である。⁽³⁾然し、如何程の大きさにして、如何なる構造を有してゐたかを詳にしないから、夫れと南蠻屏風中の小形の南蠻船との間に何等かの關聯があるかどうかは全く知り難い。

猶船に就て留意すべきは、孰れの屏風にも南蠻船は唯一艘現れてゐることである。畫面の複雑性を避けるために畫家が特に制限したとも推察されぬこともない。然し夫れだけの理由であるならば、畫風の異なる數人の畫家が孰れも船に關する限り常に同一の構想を抱いたと考へねばならないから、稍々無理



1616年のナウ模型圖

のきらひがある。之をポルトガル船渡來の歴史に徴するに、唯一艘だけ長崎へ入港した年もあり二艘乃至三艘碇泊してゐた年もあるが、其の二艘乃至三艘の場合にも定航のナウは一艘に限られ他は多くの場合支那で出來たジャンク船であつた。而して毎年一艘のナウが往來したのは永祿以後元和の初めに至るまでの原則的事實であつた。されば畫家の留意がジャンク船を除外して純洋船たるナウのみに集中したのも推察されぬことがなく、畫面にナウ唯一艘の描かれた一理由を夫れに歸することが出来るのであらう。而し元和四年以後にはポルトガルの對日本通商政策が變更され、ナウに比すれば極めて小さなガレウタと稱する船が毎年三、四艘乃至五、六艘長崎へ來ることになつた。然るに此の種のガレウタは南蠻屏風に殆んど描かれずして、ナウのみであることは屏風畫面の構成時代を定めるための最も重大なる事の一である。

註(1) 前引十六世紀日歐交通史の研究、第二編、第二章

(2) 拙稿、天正年間に於ける長崎の軍船(軍事史研究、第一卷二號所載)

五、港　　市

近世日本對外史の最も優れた研究家として令名あるイギリスのボクサー氏は、南蠻屏風畫面の時代的内容に關して二、三の研究家を次の如く評した。

ヨーロッパの研究家のうちには南蠻屏風の畫面に或る一定の歴史的場面を當て嵌めやうと企てた人があり、或る人は比較的博學なる筈の人々さへ、一五五一年（即ち天文二十年）豊後府内に於ける聖フランシスコ・シャヴィエルとフェルナン・メンデス・ピントとの會合の情景と見倣した。然し、其の事實ならぬことは、僅少なる省察で證される。南蠻屏風の製作が、シャヴィエル在留當時より約四十年後に始まつたといふことを別にしても、畫面に見えるやうなアラビヤ馬をメンデス・ピント等が舶載して來なかつたし、天主堂も當時は猶畫面の如き正規のものではなかつたし、又パードレの數の如きも畫面の如く多數は日本にゐなかつた。ポルトガル人の服裝も後のものである。其の他種々の點でそんな空想的比定を容易に駁し得る。又他の人は一五九〇年（即ち天正十八年）九州三侯遣歐使節と伴ふて再度來朝したパードレ・フリニャニの長崎上陸の有様と見た。宣教師の一群中に黒い耶蘇會修道士の外套を着た丈高い人物が目立つてゐるので、事實フリニャニが拔群の身長を有つてゐただけに、夫れを彼に充てての推察は尤もなところもある。又屏風の畫面に屢々黒白のアラビヤ馬が行列中に現れてゐるのも、使節が印度副王から豊臣秀吉への進物としてアラビヤ馬二頭を將來した事實に徴して領れる。然し、フリニャニや遣歐使節の一行は此のときには媽港からジャンク船で渡來したので、畫面の如く恆例の定航船^ナではなかつたといふ事實が此の推定論に障害をなすことになる。夫れ故に、南蠻屏風には或る特定の歴史的場面が描かれたのではなく、ポルトガル人の日本交通の美しい一面の一般的描出であつたに違ひな

い。夫れと同時に、一五九〇年に於けるワリニヤニ一行の渡來が此の種の内容を有つた屏風の畫家に最初の感興を與へたといふことも想像に餘りある。何故なら此の年代頃以前の製作として知られるものが存在しないからである。

此のボクサー氏の文には煩を厭ふて一々出典が擧がつてゐないが、耶蘇會の諸記録に通ずる人は全く思ひ當るところがあり、其の説に百パーセントの賛意を表することを惜しまないだらう。猶所謂南蠻屏風の製作の年代に就ては、殊に多くの論議が重ねられ、ボクサー氏の論文の如く、屏風畫面の内容より之に正しい斷定を與へ、又他の諸家によつて、美術史的詮議も行はれて、略々定説も生じてゐることであるから、夫れは私の敢て閑却しやうと欲するところである。夫れ故に私が敢てボクサー氏の論文の一節を茲に引用したのはボクサー氏の尻馬に乗つて屋上に屋を架するためではない。此のうに製作時代に就て二、三のヨーロッパの學者にボクサー氏が評言を送つた方法を眞似て、屏風の畫面に現れる場所に就て私は二、三の學者に苦言を呈しやうと欲するからである。

ボクサー氏の指摘した時代的錯誤にしても、錯誤を敢てする人の考へのうちには中心舞臺に上る人物への偏重が幾分でも加はつてゐないとはいへないやうである。例へばフェルナン・メンデス・ピントを特別に最負目に見るとか、聖フランシスコ・シャヴィエルを重しとするとかいふやうなことである。畫面の場所に就ても、今日まで甲論乙駁あり、或ひは之を長崎に或ひは豊後に或ひは平戸福田等に、或ひ

は堺に當てるといふ種々の説が生じたが、其の提唱者が多かれ少なかれ夫れ等の土地と關係を有して、其の地に生れ、又は永住し、又は特に地方史編述の掌にある人等もあつた。公平なるべくして公平ならぬ結論に達するのは、蓋し其の地への偏愛により、且つは確實なる知識に基づかぬからである。

さて屏風の畫面に南蠻船の現れてゐる港津に就て（但し外國港の場面と見倣されるものを除外して考へる）第一に畫面の南蠻船が何國船であつたかと限定する必要があるが、夫れは既に論じた如くポルトガル船に外ならぬとすれば、第二にポルトガル船は十六、七世紀を通じて孰れの港へ入つたかを確實にしてをかねばならない。十六世紀の大部分に關する限り私は他書に特に此の問題を論及したから、委細は夫れに譲るとして、簡略に指摘すれば、豊後へ着いたのは一五六〇年（即ち永祿三年）以前に屬し、平戸入港は一五六四年を以て一旦打ち切りとなり、横瀬浦は一五六二、三の兩年間のみ貿易港であつた。福田着港は一五六五年（永祿八年）より一五七〇年（元龜元年）までの五箇年間であり、夫れ以後即ち一五七一年以後では七六、七九、八〇、八二年に於ける口ノ津、一五八四、八六年に於ける平戸に各一艘の入港があつた外、殆んど毎年長崎へ一艘乃至二、三艘の渡來があり、一六一八年（元和四年）以後には前述の如く、ガレウタといふ小船數艘が鎖國令の強行されるまで引き續き長崎へ來たのである。一五八七年、八九年にエスパニヤ船が天草と薩摩の港へ漂來したことがあり、一五九二年（文祿元年）以後に薩摩の京泊平戸等へ數回入港したことを添加しやう。然し畫面の南蠻船がエスパニヤ船ではない

ことが知られるから、夫れは參考までに述べるだけである。

最近までに存在の確かめれた五十に餘る屏風には其の製作が文祿慶長の頃より遡るものが一もないと推定されるから、所謂南蠻船即ち畫面の場合のポルトガル船の現れる港津を豊後の府内に宛てはめることは、屏風畫の製作者が三十年前の狀景を想起するか、又は三十年前の畫を模寫したと考へない限り無理であり、且つ又豊後に船の入つた當時の事情はボクサー氏の文に見える如く、畫面の夫れとは全く一致しないのである。一五六四年以前の平戸、一五六二、三年の横瀬浦、一五七〇年までの福田に就ても、府内の場合と程度の差があるだけで、是亦同様に否定し得る。一五八四、五兩年の平戸入船に就ては、前者のときには全くフィリピン群島のエスパニヤ人及びその宣教師を載せ來つてポルトガル人と關係淺く、耶蘇會宣教師とは全く縁が少ないから、それを畫面に表はされたと考へることは不適當である。さうすれば唯一度の一五八六年(天正十四年)の平戸入港の場合のみが問題になる。同様にして天正四年乃至十年に亙る間の四度四艘の口ノ津の入港も全く無視することが出来ない。然し長崎へは元龜二年以後七十年間毎年一艘ときに二、三艘渡來して交易をなしたことと、且つ設備に於て住民の氣風に於て南蠻船貿易港として他の匹敵し難い位置を占めることと、また耶蘇會の諸教會堂、諸施設のみならず、慶長年間には其の他のフランシスコ會等他會派の宣教師も或ひは其處に教會堂を建て或ひは屢々訪れ來つたこと等を考へれば、屏風畫面の港市を平戸、口ノ津に結びつけるに數倍する深縁を長崎に見出さねばなら

ない。されば、畫家が天正末より慶長、元和の間に互つて、十年乃至二十年以前に於けるポルトガル船の平戸、口ノ津入港の情景を描いたといふよりも、慶長年間にその目堵したところに従つて長崎を描いたといふ方が畫面の諸條件に最も適合するのである。

次に堺説に就ては、足利末期より堺が盛大なる貿易港であり、従つて南蠻船が入港したことを信長記等によつて肯定する論據に立つ説や、更に一步進んで或る屏風の畫面に街區に直角に交はる溝渠の見えることを證として、當時市街の三方に溝渠を廻らした堺に該當すべきだとの主張がある。事實に於て永祿以來の堺は南蠻人と決して無關係ではなかつた。耶蘇會の近畿地方布教には堺も亦其の一中心であつた。又ポルトガル船の九州諸港へ着いたときには堺の商人が頻りに夫れらの港へ赴いて取引をし、長崎が港市として開かれると、堺より移住した人も少なくはなかつたことが宣教師の諸報告中に見える。又秀吉が九州征伐の間に、八代に於て耶蘇會の長老及びポルトガル船の事務長等を引見したとき、ポルトガル船の堺入港を慫慂したこともあり、更に南蠻屏風其の物が多くは近畿地方で製作せられたのではないかと思はれることも堺の港市を背景として描かれたと見倣すに好都合なる條件である。

然し、之を更に熟考するならば、茲に列舉した事は堺へ南蠻船の入港があり得さうだといふ可能性を示すに止まり、其の事實なるを斷定する一證にもならないのである。實際に於て天文年間ポルトガル人との交渉が開けて以來寛永末の鎖國令が布かれるまでの百年間、毎年來往のポルトガル船の數と其の入

港地とは殆んどヨーロッパ人の記録によつて確められるが、彼等の船の九州以外の港へ來たことは絶対にないといつて差支へがない。若し強いてエスパニヤ船に附會するとしても、慶長十三年(一六〇八年)、十六年に關東の浦賀へ入港した以外は慶長元年(一五九六年)土佐へ、慶長十四年上總へ漂着したことがあつただけで、他は悉く九州へ着いたのである。次に溝渠に就て見ても元龜二年以來毎年ポルトガル船の着いた長崎に於ても、天正二年西郷、深堀兩氏の軍に攻められたとき、教會を中心とする港の住居地に木砦を造り濠割りをなして夫れを防いだことがパードレ・ルイス・フロイスの日本史に見え、且つ同パードレが日本史を著はした一五八五年(天正十三年)頃にも、天正二年の防禦設備が其のまま残つてゐたと記される。又一五八三年にパードレ・アレックスサンドロ・ワリニヤニの著はした書にも同様に長崎が樓砦と濠窖とを以て防備せられてゐることが記され、長崎の舊記に因つて正徳年間に編まれた長崎縁起略記にも「一ノ堀の間に六町の町を立て」といひ、また「一ノ堀とは島原町後藤氏の堀なり二ノ堀は櫻町にあり今の札の辻なりといふ三ノ堀は今の高木の邊是を三ノ尾といふ」と傳へられてゐるから、當時の長崎市街の状態の幾分を想像することが出来る。夫れ故に十六世紀末には長崎の市街に溝渠の存在したことを推斷し得るから、夫れを以て堺のみの特徴とはいへないやうである。

然らば南蠻船の現れる畫面の日本の港は堺にあらず、府内にあらず、平戸にあらずとすれば、當然の結果長崎に之を充てねばならない。然し、十六世紀末十七世紀初めの長崎港の情況が果して幾つもの屏

風に見える通りであつたかどうかとなると、敢て夫れを可否することは不可能であらう。況して、長崎の何處に該り、當時然る如き天主堂や商家等が船着場の附近に並んでゐたか、又背景をなす松林もどうであつたか等の委細の點になると全く知り難しといふ他にない。私の想像するところでは、此の種の屏風には多くの裝飾的附加物であり、又必ずしも悉く寫實によつて描かれたものではあるまい。港の有様其のものにも畫家の自由なる構圖によるものがあらう。されば堺の如き近畿の港の景色も絶対に畫家の着想を刺戟しなかつたとは斷言出來ない。夫れに拘らず、南蠻人と船とに於て概ね寫實的描畫をなした畫家が、背景をなす港津の建築物等に就ても幾分の現實感を交へなかつたとはいへないから、其の意味で之を何處に當てるかとなれば、長崎以外にないといふべきであらう。されば當時の長崎の情況の幾分は之等の南蠻屏風の畫面を以て推察することが出来るかも知れぬと思ふのである。

註(1) Boxer, Some Aspects of Portuguese influence in Japan. (Trans. Japan Society. Vol. xxxIIII)

(2) 前引十六世紀日歐交通史の研究、第二論、第四章